神戸女学院大学大学院　人間科学研究科　大学院教育改革支援プログラム

「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」

2007－2009活動報告書

神戸女学院大学大学院　人間科学研究科　2010年3月

Contents

1　活動の目的・概要 …… 3

2　活動の計画・スケジュール …… 5

3　活動報告

Ⅰ.心理相談室のアウトリーチ活動の実習化 …… 7

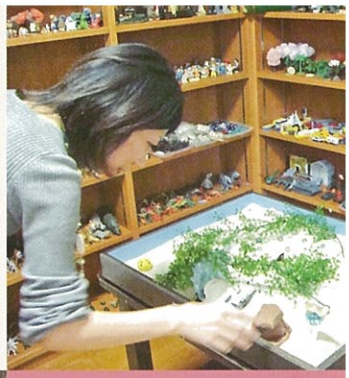
Ⅱ.地域実践活動の実習化 …… 14

Ⅲ.比較文化的視野の陶冶（国際交流） …… 20

Ⅳ.大学教育改革合同フォーラムでのパネル発表 …… 27

4　評価と課題 …… 28

5　資料 …… 31



はじめに

神戸女学院大学人間科学研究科は、博士前期課程、後期課程を合わせて収容定員26名の小規模な大学院ですが、1997年の設置以来、臨床心理学、人間行動学、環境科学、健康科学の4つの専門分野の教員と大学院生とが共に学び、研究してきました。

中でも臨床心理学分野では、専門性を持つ臨床心理士として大学院生を養成してきましたが、人文科学、自然科学の枠組みを超えた学際的で自由な人間科学研究科の雰囲気の中で、さらに広い視野から地域へと情報を発信し、共有できる臨床心理士を養成しようと、文部科学省の助成を受けて取組んだのが今回の「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」プログラムです。従来の付属心理相談室での研修を越えて地域社会の生活の場へ飛び込んでの実習や、さらにアジアへもフィールドを広げた研修に当初は戸惑いもありましたが、3年間の取組期間を通じて、様々な成果と今後に向けた課題が得られたと確信しております。その一端を、この報告書でお示しできればと思っています。

人間科学研究科 研究科科長　教授
西田 昌司

大学院教育改革支援プログラムとは

「大学院教育改革支援プログラム」[大学院GP(Good Practice)]とは、文部科学省によって2007年度より開始され、産業界をはじめ社会の様々な分野で幅広く活躍する高度な人材を養成するため、大学院における優れた組織的・体系的な教育の取組を選定・サポートするものである。

1
活動の目的・概要

臨床心理士は、スクール・カウンセラーをはじめ、社会の多様な場面で心の支援を行う高度専門職として既に一定の評価を得ている。しかし多様化・複雑化・流動化する社会において、心の支援に対するニーズも刻々と変化し、臨床心理士は現実に即応した対応を常に創造していかねばならない。面接室で援助対象者が来談するのを手を拱いて待っているのではなく、積極的に社会に出てニーズをリサーチしたり掘り起こし、これまで支援の手が届かなかった場で活動を開拓したり、事態が深刻化・遷延化するまでに早期改善を図ったり、あるいは啓発的・予防的な取組に従事することも、臨床心理士の重要な役割となりつつある。そのためには、基本となる心理臨床的技能を確実に習得した上で、さらに地域の臨床的ニーズを把握し、他職種の専門家とコミュニケーションを図って協働し、支援策を現場に合わせて創造的に開発するといった諸能力が求められる。

上記の問題意識から、本分野では既に以下のような試みを、大学院生や修了生に積極的に参加させて、教育課程（履修科目）外で行ってきていた。

(a)心理相談室の活動を拡大するための地域臨床ニーズのリサーチと教員・院生の現場への派遣（アウトリーチ）。

(b)子育てや女性の自己実現を支援する講演会やワークショップの開催。

(c)教育・医療現場へのボランティア派遣（心理臨床インターンシップ）。

(d)実践活動に関する研究とその公表（心理相談室紀要の発行）。

(e)本研究科を修了し多様な現場で活動する臨床心理士との定期的交流（修了生のリカレント）。

これらの活動を通して我々は、女性の臨床心理士が、出産や子育てを通して女性が母親となる過程、また中年期以降に女性が自分らしさを探求する過程、あるいは乳幼児・児童の発達過程等の支援に、特に貢献できることを経験的に確認している。と同時に、既存の職域や職場の枠を越えて、新たな支援の場と支援の方法を創造的に開発する必要性を痛感してもいる。そこでこれらを教育課程と心理相談室の活動に有機的に結びつけ、より組織的・体系的に実践することで、院生の教育と大学の地域貢献に役立てようと考えた。

具体的には、

①1年次に、地域臨床ニーズのリサーチと、関係機関とのネットワークの構築を行う（「臨床心理基礎実習」の内容の拡充）。

②1、2年次に、教員が一般者を対象に行うワークショップ、スキル・トレーニング、また諸施設でのスーパーヴィジョン等に補佐として参加し、実践の技能を修得する（「臨床心理実習」の内容の拡充）。

③2年次に、多様な地域臨床活動の現場へ1年間の心理臨床インターンシップを実施する（「臨床心理地域実践実習」を新設）。

④国際化に対応し、異文化理解に基づく心理臨床活動を行うため、近隣諸国の心理臨床実践を視察し、臨床心理学を学ぶ院生との交流を行う（この準備として「臨床心理比較文化特論」を新設）。

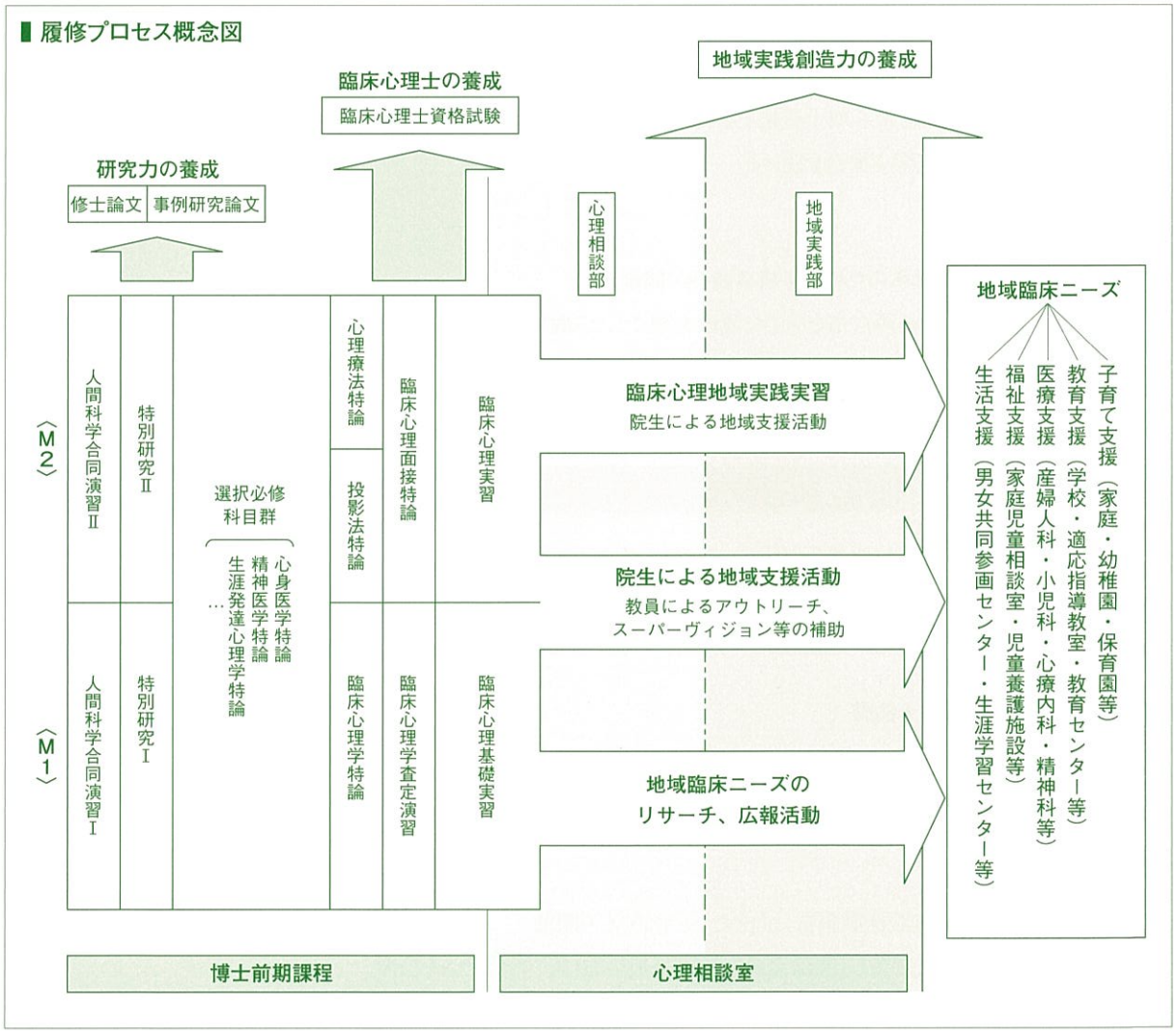
⑤以上の臨床心理学的地域支援について研究としてまとめ、2年次の終わりに修士論文あるいは心理相談室の紀要等で発表する。

これらの活動を実施するに当たって必要な実践上の知識、臨床的態度や技能を、既存の講義や演習、実習等で確実に修得させる。本分野は、臨床心理士養成課程として、臨床心理士になるために必要な知識・技能を修得する教育課程を既に持っている。これを基礎に、上記の目的に向けた、高度職業専門人育成への実践的教育内容に特化したカリキュラムの強化を図るものであった。

最後に、本取組は心理相談室の機能や相談室活動の経験の蓄積を核にしたものである。そこで心理相談室の既存の組織を拡充して、既存の心理相談室における個人面接相談を管轄する「心理相談部」と、上述した啓発・予防のための数々のアウトリーチ・プログラムを企画・実施する「地域実践部」に事務機構を分割し、それぞれが大学院生の実践教育に貢献できるよう、再組織化を行った。

これらを図示したのが、以下の履修プロセス概念図である。

（石谷 真一）



2
活動の計画・スケジュール

2007年（平成19年）度

第1年目は、GP支援による新カリキュラムを適用する初年生を迎える年であり、博士前期課程2年次に履修することになる、「臨床心理地域実践実習」「臨床心理比較文化特論」等の科目やそれに連動する国際交流の準備に力を注ぐ予定であった。初年生（博士前期課程1回生）には、従来の1年次のカリキュラムを実施するかたわら、「臨床心理基礎実習」に含みいれた、教員によるアウトリーチ活動やスーパーヴィジョンの補助に関わらせるべく、以下の活動を企画し、院生に積極的に関与させることとした。

心理相談室のアウトリーチ活動

①心理相談室ウィークの実施

夏期学休期間中に1週間にわたって、心理相談室で無料体験相談を実施。心理相談活動について実体験を通して知っていただくもの。期間中に心理相談室見学会も開催。また心理相談室教員スタッフによるワークショップも行う。

②地域現場で心理臨床活動を行っている卒業生（臨床心理士）との合同事例検討会

本学大学院を卒業し臨床心理士資格を取得して、様々な臨床現場で実践活動に従事している先輩達の取組について、事例検討を通して深く学ぶ機会を設ける。

地域実践活動

①臨床心理士の地域貢献のための連絡協議会の開催

本学の位置する兵庫県西宮市を中心に臨床心理士による地域貢献のあり方を模索するため、子育て支援を主たる領域として、地域の実践家と意見を交わす機会を設ける。

2008年（平成20年）度

第2年目は、初年生（博士前期課程2回生）に「臨床心理地域実践実習」を履修させ、1年間を通して地域の臨床現場で研鑽を積ませる。また「臨床心理比較文化特論」と連動させ、国際交流事業として、隣国韓国の心理臨床事情の視察と臨床心理実践家養成課程の院生との交流を行う。今年度の入学生（2期生）については、初年度と同様の諸活動に従事させる。

心理相談室のアウトリーチ活動

①心理相談室ウィークの実施

②地域現場で心理臨床活動を行っている卒業生（臨床心理士）との合同事例検討会

地域実践活動

①臨床心理士の地域実践活動創造に向けたシンポジウムの開催

今年度は、地域に広く広報し、関係者のみでなく一般の方にもシンポジウムを公開。

②博士前期課程2回生の心理臨床インターンシップの実施

前述した「臨床心理地域実践実習」に相当。本学教員と各地域臨床現場の実習指導担当者による二重の指導・監督の下に行う。年度末に実習報告会を実施する。

③地域臨床現場で働く臨床心理士によるシンポジウム

実習先の臨床現場で実践にあたっている臨床心理士による、地域実践活動の実際をテーマにしたシンポジウムの開催。

比較文化的視野の陶冶

①「臨床心理比較文化特論」の開講

心理臨床実践における異文化理解の重要性を様々な体験を通して学ばせる。

②韓国ソウル東部児童相談所および明智大学との交流

隣国韓国の心理臨床事情の視察と臨床心理実践家養成課程の院生との交流を行う。

2009年（平成21年）度

第3年目はGP終了後を見越し、新たに始めたカリキュラムや諸活動を継続・発展していくための整備にも力を入れる。また3年間の活動を総括した報告書を作成する。

心理相談室のアウトリーチ活動

①心理相談室ウィークの実施

②地域現場で心理臨床活動を行っている卒業生（臨床心理士）との合同事例検討会

地域実践活動

①臨床心理士の地域実践活動創造に向けたシンポジウムの開催

今年度も、地域に広く広報し、関係者のみでなく一般の方にもシンポジウムを公開。

②博士前期課程2回生の心理臨床インターンシップの実施

前述した「臨床心理地域実践実習」に相当。本学教員と各地域臨床現場の実習指導担当者による二重の指導・監督の下に行う。年度末に実習報告会を実施する。

比較文化的視野の陶冶

①「臨床心理比較文化特論」の開講

心理臨床実践における異文化理解の重要性を様々な体験を通して学ばせる。

②台湾中原大学心理学科との交流

台湾における心理臨床実践の見聞と、臨床心理士養成の課程について実際に教員・院生同士の交流を通して知る。

（石谷 真一）

3

活動報告

I. 心理相談室のアウトリーチ活動の実習化

本学心理相談室は、本学大学院人間科学研究科の管轄する機関であり、本研究科臨床心理学分野の大学院生の実習科目「臨床心理学基礎実習」「臨床心理学実習」の実習施設として、また学外の心理的支援希望者に対する臨床心理学的援助を実践する機関として機能してきた。本分野は、臨床心理士資格認定協会の定める第1種指定大学院であり、同協会の指定した教育カリキュラムの一部を本相談室で行ってきた。

従来の心理相談室の主な活動は、心理相談を希望する方への心理面接を中心としたものであった。しかしながら心理相談室のさらなる地域貢献と、大学院生の心理臨床実践教育を拡充するために、面接室での個別相談を越えた実践活動の必要性も感じてきた。今回、大学院GPの採択を受け、心理相談室を大学院生の実践教育の中核として、その機能をさらに拡張し、大学院生の教育に連動すべく数々の活動を行った。上記の目的に沿って、心理相談室で相談希望者を待つのではなく、学内外に場所を設定しての様々な予防・啓発活動や広報活動、地域実践家との連携網の形成、地域機関へのコンサルテーション等、アウトリーチ活動に取組んだ。以下に、その代表的なものである心理相談室ウィークとシンポジウムについて報告する。

（石谷 真一）

第1回心理相談室ウィーク講演会「子どもと向き合っていますか ～ほめること、叱ること～」

日時：2007年8月1日　13：00～15：00
場所：デフォレスト館

講師：國吉 知子氏

1. はじめに　～心相ウィーク実施のねらい～

「心相ウィーク」とは、心理相談室の新たな地域実践活動であり、地域の方々に広く本学の心理相談室の活動を周知し、身近に感じていただく機会を提供し、地域支援に役立てようとするものである。初年度は、女子大である本学の心理相談室が元々児童相談室であったことにちなみ、「子育て支援」を地域実践の柱と考え、子育て中の親御さんに役立つよう、ワークショップ形式を取り入れることで、日々の子育てに生かせる支援を目指し、8月1日に「子どもと向き合っていますか ～ほめること、叱ること～」というテーマで講演とワークショップをおこなった。院生は会場係などのサポート役として関わった。なお、無料体験相談（7月29日～8月3日）は事前予約制であったが、講演後、希望者には無料相談にも対応できるような工夫もおこなった。

2. 講演とワークショップの概要

講演会は、午後1時から約2時間、デフォレスト館でおこなわれた。宣伝が不十分であったが、参加者は25名と実習に良い人数となった。参加者の方々の和やかな雰囲気のなか、前半は「ほめる」ことの利点と問題点について内発的動機づけの観点から解説し、後半はロジャーズの「無条件の肯定的関心」に焦点をあてたワークショップを実施した。ロールプレイでは、あちこちから明るい声が聞かれ、話し合いがはずみ、シェアリングでは、ほめることで相手を操作する危険性や相手に「関心を持つ」ことの重要性などが理解できたという感想が多く聞かれた。講演終了後は、希望者を心理相談室に案内し、教員や大学院生らが心理相談室内のプレイルームや面接室などの説明をおこない、質疑応答に応じた。参加者の中には、「どうしてこれまでこういった催しのご案内がなかったの？」と継続実施を望むというご意見もいただき、好評のうちに講演会を終えることができた。

3. 院生の教育への反映

後日、主体的に院生や研修生同士で話し合いが持たれ、教員を交えてシェアリングを実施した（教員を交えてのシェアリングも毎年実施）。無料相談体験は一期一会の相談のため、普段と異なる対応が必要となるため、いかに適切な対応ができるかが焦点となった。相談申込時の電話応対も含め、相談活動の原点を振り返る学びの機会となった。

（國吉 知子）

第2回心理相談室ウィーク講演会

「家庭、地域、学校で連携して子どもを育てるために―スクールカウンセラーの視点から―」

日時：2008年7月30日　13：00～15：00
場所：デフォレスト館

講師：小林 哲郎氏

2008年7月28日～8月1日までの期間、昨年に引き続き第2回「心相ウィーク」をおこなった。この催しは、本学の心理相談室の活動を地域の方に広く知っていただき、活用していただくために企画されたもので、大学院GP「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」の一環として、位置づけられている。予約制の無料体験相談と相談室の見学、そして、公開の講演会を組み合わせた企画である。

講演のタイトルは「家庭、地域、学校で連携して子どもを育てるために―スクールカウンセラーの視点から―」。7月30日午後1時から約2時間、本学のデフォレスト館でおこなわれた。講演については、事前予約は不要なので、どれくらいの方が来られるか予想ができなかったが、結局、約60名の参加者になった。

この講演でお伝えしたかったことは、我が国の学校は生徒指導にも重点がおかれ、人格形成や社会性を身につけさせることに力を入れていること。しかし、価値観の多様化、私事化など社会の変化の中で、学校の役割がわかりにくくなり、地域のつながりも薄れていく中で、家庭、学校双方の誤解や行き違いも増えてきている。どうしたらいいかというときに、まず主役である子どものために何ができるかという視点に立ち返るべきではないのか。学校と保護者がお互いの立場や思いを理解し、子どもの心身の成長を促す環境を整備していくべきではないか。また、地域の人たちも、子どもたちのために学校運営に参加したり、学校ボランティアなどの活動が活発になることによって、家庭、地域、学校の連携がスムーズになるのではないか。それぞれの思いこみに偏り、対立しないためにも、お互いを理解しながら連携することが、子どもたちのためになるということである。

講演終了後には、希望者には心理相談室の見学もしていただき、プレイルームや相談室がどのようなものか、実際に見ていただく機会ももてた。地域の方との交流もでき、有意義な心相ウィークとなった。

（小林 哲郎）

第3回心理相談室ウィーク講演会「心の悩みと心の病気」

日時：2009年7月31日　13：00～15：00
場所：デフォレスト館

講師：水田 一郎氏

心の悩みと心の病気（精神疾患）の関連について、以下の流れに沿って述べた。長時間の話にも関わらず、参加者の方には熱心に耳を傾けていただき、最後の質疑応答の時間にも、活発にご質問やご意見をいただくことができた。

①心の病気（精神疾患）は稀なものではない。誰もが心の病気にかかる可能性がある。ある調査では、何らかの精神疾患を患ったことのある人は、過去1年に限っても4人に1人、これまでの生涯という長いスパンでみた時には、2人に1人という結果であった。②心の悩みと心の病気は区別しにくい場合がある。その理由として、「心の病気は特別な人だけがかかる特殊な病気」という誤解、心の病気には客観的な所見が殆どないこと、心の悩みと心の病気の間のグレーゾーンが広いことが考えられる。悩みとも病気とも言い切れないケース、あるいは、悩みと病気のどちらの要素も併せ持っているケースが、現実には非常に多い。③心の悩みと心の病気を区別する指標として国際的な診断基準（ICD、DSM）が作成されている。専門家は、心の病気の診断に際して、ある程度、この診断基準に依拠している。④心の病気の症状は、一つ一つを取り上げれば、病気でなくても経験される可能性がある。病気とみなされるためには、一定数以上の症状が一定期間以上認められること、そして、それらの症状の程度が通常予想される範囲を超えており、症状のために生活や人間関係に支障が出ていることが必要である。⑤心の病気の主な治療法としては、薬物療法、心理療法（カウンセリング）、環境療法がある。病気の種類や時期によって、これらの治療法を組み合わせて行うのが治療の原則であるが、現行の健康保険制度など、幾つかの制約のために、必ずしも理想的な治療が行えていない現状がある。⑥家族や友人、あるいは自分自身が心の病気にかかった時、どのように対処すればよいか。心の病気の確実な予防法がまだ発見されていない現在、おそらく、最も効果的な対処法は早期発見・早期治療である。そのために、心の病気についての基本的な知識を持っておくこと、そして、気がかりなことが生じた時には気軽に専門家に相談することを勧めたい。

（水田 一郎）

第1回シンポジウム「子育て支援、地域の取組みと大学の貢献のための連絡会」

開催日時：2008年2月23日
会場：西宮市大学交流センター会議室

シンポジスト：西宮市健康福祉局こども部　杉田 水脈氏
私立みそら幼稚園園長　西川 英美氏
神戸女学院大学大学院　石谷 真一氏

本シンポジウムは、臨床心理士が地域実践活動を創造するという、本GPのテーマに即して、子育て支援領域を中心に、地域現場の実情と近接領域実践家の取組みを知り、かつ地域で取組みを行っている方々との連携を模索する目的で行われた。

まず、西宮市健康福祉局の杉田氏より「西宮市次世代育成支援行動計画～子育てするなら西宮～」と題して、西宮市内外の子育て事情と西宮市での数々の支援の取組みを報告いただいた。震災以降、子育て世代の流入が著しく、他の地域とは異なる課題も見えてきた。

続いて、みそら幼稚園園長の西川氏からは幼稚園での取組みが紹介され、「子育て支援」という言葉によって親の責任や役割が軽視されてはならず、むしろ「家庭教育支援」という観点で支援を行っていることが述べられた。また幼児・保護者への専門的な心理的支援の必要性を強調されると同時に、これまで心理専門家と現場の幼稚園教諭との間で十分なコミュニケーションが図られてこなかった点もご指摘いただいた。最後に、本学臨床心理学分野教員の石谷より、発達早期の親子の関係性とそれぞれの心の発達・変容の交互作用モデルという視点が提示され、それに基づく乳幼児期の親子関係の問題とそれへの早期介入のあり方について、諸外国の取組みが紹介された。

その後、自由な雰囲気の中で数々の意見交換が為されたが、お互いの専門性を理解し合い、連携・協働のあり方を探る上で、継続的なコミュニケーションが是非必要であること、特に幼稚園などの現場に臨床心理士が赴くことへの期待と要望が語られた。フロアにも、西宮市域を中心に、子育て支援に関わる実践家が数多く見えられ、支援へのニーズは多いが専門的な支援を行える者が現場に十分おらず、ニーズに応えきれないでいる現実が語られた。

今回のシンポジウムを通して、大学院生も地域の現状と心理臨床的支援へのニーズの高さを肌で感じるとともに、よりいっそう実践的な心理臨床活動の習得が必要であることを実感した。この冬のシンポジウムは、夏の心理相談室ウィークとともに、本学心理相談室主催（かつ、大学院生の実習活動の一端として）の定例行事として毎年継続していく予定である。

（石谷 真一）

第2回シンポジウム「子どもが育つ場を考える ～家庭・地域・教育現場・臨床心理士の連携～」

開催日時：2009年3月7日
会場：西宮市大学交流センター大講義室

シンポジスト：立花愛の園幼稚園園長　濱名 浩氏
瓦木・深津県民交流広場運営委員長　山本 三千氏
神戸女学院大学大学院　小林 哲郎氏

本シンポジウムはテーマにあるように、広い視野から子どもが育つ環境が今如何に変貌しているのか、そうした状況の中で地域のマンパワーをどのように生かして子どもが育つ過程を援助できるのか、について、シンポジストの提供していただいた話題をもとに考えようというものだった。子どもが育つ場は、家庭であり、地域であり、幼稚園・学校等の教育機関でもある。臨床心理士がそれぞれの場で果たせる役割とはどのようなものであろうか。このような意欲的なテーマに今回は取組んだ。

まず、立花愛の園幼稚園園長の濱名氏より、私立幼稚園で見る母子と母親への支援を報告いただいた。濱名氏は兵庫県私立幼稚園協会副理事長でもあり、その立場から、私立幼稚園の共通した子育て支援プログラムも紹介された。公立幼稚園と違い、私立の幼稚園では臨床心理士による園児やその親への相談は各幼稚園の裁量に任されており、多くは財政的な支援がなく、独自に臨床心理士を配置するのは難しい現状も述べられた。濱名氏が園長を勤める二つの幼稚園では、近年の傾向として過保護か放任かの両極端のタイプの母親の子に園での不適応が見られやすいこと、母親が変化することで園児が目覚しく変化することが多いことから、母親同士の仲間作りを促すような行事を積極的に作っていることなどの工夫が紹介された。

続いて県民交流広場（通称、ぽっかぽかひろば）運営委員長の山本氏は、氏のこれまでの地域活動を紹介する中で、この交流広場を作ることを思い立った経緯をお話いただいた。氏自身が子育てを行った頃に比べ、震災を経て、地域自体の子育て力が衰退していること、以前、近隣の大人たちが普通に行っていた、子どもたちを見守り、注意し、育てる機能を積極的に復活させるために拠点作りが必要なこと、そのために行政や学校と連携して、県民広場を学校の敷地内に建物から創り出したことが語られた。ここでは、放課後、孤立化しやすい子ども達が安心して過ごせる居場所作りをめざしており、しかし学童保育のように親が子どもを預けるという場ではなく、親の自覚や子ども達への関心を高めることを忘れない配慮が述べられた。

最後に本学大学院臨床心理学分野教員の小林氏からは、子どもを取り巻く環境の変化について数々の資料を提示しての説明があり、学校を初めとする教育機関が果たしてきた役割も減衰する中で、子ども達に変化が生じていることが解説された。その上で、学校を一つの拠点として地域と連携し子どもが育つ場を再生する試みがあることが述べられ、臨床心理士がスクールカウンセラーとしてどのような役割を果たしているか紹介された。

今回のシンポジウムは一般の方に広く開放したものであり、子育て中の母親を初め一般の方にも参加いただいたフロアからは、支援のニーズの声もいただいた。シンポジウムの運営・補助を行った院生は、前回のシンポジウムに続き、現場での心理臨床的支援へのニーズの高さと、現場での取組みを続けている実践家の工夫と努力を目の当たりにできた。こうした地域現場で、臨床心理士の専門性を生かした支援活動をどのように創り出すか、そもそもこのような現場で他領域の専門家と協働する中で臨床心理士の専門性をどのように捉え発揮すべきか、大学院生は大きな課題もまた持ち帰ることになった。

（石谷 真一）

第3回シンポジウム「臨床心理士は地域支援活動をいかに創造できるか、その方法と課題～子育て支援を中心に～」

開催日時：2010年3月7日
会場：西宮市大学交流センター

シンポジスト：NPO法人子どもの心理療法支援会理事長　平井 正三氏
NPO法人子どもの心理療法支援会専門会員　竹山 陽子氏
神戸女学院大学大学院　國吉 知子氏

本シンポジウムは、3年間のGP活動の締めくくりとして、地域実践活動を臨床心理士としていかに創造し継続的な実践を行っていけるかについて、NPO法人を立ち上げ臨床心理士の立場からの子育て支援を行っておられる、平井氏と竹山氏をシンポジストに招き、検討した。

平井氏からは、NPO法人を立ち上げるに至った経緯と支援会の活動の実際について、具体的にお話いただいた。平井氏の専門的立場は精神分析的心理療法にあるが、それが児童福祉の対象となる子ども達、また発達障害の子どもやその親の心理学的支援に役立てられるとの認識と同時に、上記の親子、またその発達支援に関わる人々に臨床心理学的支援が行き渡らない現状を鑑み、心理療法が受けられるための経済的支援と、子どもが育つ現場に専門家を派遣する人的支援を行っていることを紹介いただいた。公的機関では援助が十分に行き渡らないそのはざ間にある人々への支援こそ、NPOという自由な立場で活動できる組織が対象とすべきであること、また長期にわたる支援が必要であるにもかかわらず、既存の機関はそれを用意できる体制にないこともNPO組織が必要とされる理由であるとの指摘もあった。

次に竹山氏からは、NPOによる支援活動の一つである「発達相談サービス」について、担当者としての経験を交えて、詳細にその内容をお話いただいた。「発達相談サービス」は、発達面での心配事をもつ子どもとその親に対し、回数を定めて面接相談を特別料金にて実施するというもので、回数限定ながら極めて中身の濃い相談面接を行っていることを示された。また「発達相談サービス」が本格的な心理療法的支援の入り口となることもお話いただいた。心理療法面接への敷居は今なお高い面があり、その導入に対し、氏の話はたいへんヒントになるものであった。

最後に本学臨床心理学分野教授の國吉氏より、「地域実践の視点を育成する神戸女学院大学のとりくみ」と題した報告があった。氏はまず臨床心理士による子育て支援のニーズがどれ程見込まれるのかについて、数々の資料を挙げて解説し、広く各地域で自主的に営まれている子育てサークルとは別に、専門家の入った心理教育的グループの存在意義を強調された。氏は、大学院生の実習教育をかねて教員・スタッフが積極的に学生を率いて地域現場に赴くことで、身をもって臨床心理士としての地域実践創造力を育成するとともに、地域との連携を深めることになることを指摘された。

大学院生にとって、NPOとしての心理臨床実践を聞く機会はあまりなく、新鮮な発見が多く見られた。一方で、臨床心理士としての専門性の習得は決して資格取得で終わるものではなく、職業生活を通じて追求されるべきものであることを強く実感したようであった。シンポジウムは今後も継続し、地域実践家との連携網の構築、本学心理相談室の諸活動の広報の機会、そして大学院生の実習の一端として、今後も継続していく予定である。

（石谷 真一）

Ⅱ. 地域実践活動の実習化

臨床心理士として実践活動する現場は多岐にわたり、医療、教育、福祉、警察、司法・矯正、産業など多くの領域にわたる活動分野がある。そして、いずれの施設も、自治体単位も含めて、大小の地域コミュニティに根ざした活動をしている。それぞれの領域の特殊性をふまえ、また、地域との関係を意識しながら、臨床心理士の専門性をどのように発揮するかということを学ぶとしたら、やはり、現場に行って実習をさせてもらい、体験させてもらうことが、一番適切な学習方法であろう。

このような趣旨で、本学では、各施設の協力を得て、適応指導教室、児童相談所、心療内科、精神科クリニックの予診、デイケアを週一日1年間を原則とする実習を大学院の授業として実施している。体験を通じて各領域の仕事を理解し、その中で課題を見つけ、現場の臨床心理士に指導を受けながら、臨床心理士の専門性をどう活かすかを考えることが地域実践活動実習化のねらいである。また、関連する取組として、実習体験を交流し、深めるための実習活動報告会、現場の実践家を招いてのセミナー、地域実践臨床家を招いての卒業生、現役生合同の研修会を実施して、それぞれの実習体験をベースに地域実践活動の意義と臨床心理士の専門性の関わりをより深く考察できるようにしたのである。

（小林 哲郎）

実践実習報告会

各実習現場は領域も仕事も多岐にわたっており、そこでの体験内容も違ってくる。しかし、臨床心理士という専門性のもとに行う地域実践活動であるという点は共通している。そこで、実践実習報告会という機会を作り、それぞれの実習体験をパワーポイントで紹介し、そこで感じたことや臨床心理士の専門性について考えたことを発表し合うことにした。それぞれの実習体験を報告することにより、自分たちの実習体験を発表のためにまとめて振り返ることになり、他の実習の中身を理解することにより、その異同を通じて、臨床心理士の専門性を考えるきっかけともなることが期待される。また、他の院生からの質問、意見や教員の指摘により、課題に焦点が当てられ、討論によって深める機会となるであろう。実際に、有意義であったという院生の報告を以下に紹介する。

（小林 哲郎）

2008年度の実践実習報告会は、M2の先輩方の実践実習についての発表を聞く立場として参加させていただきました。先輩方の実習の場は、精神科、適応指導教室、心療内科、精神科復職施設、児童相談所と多分野に分かれています。精神科においては初診における面接、適応指導教室においては不登校の中学生との活動の中でのやりとり、心療内科においては診察の陪席、精神科復職施設においては復職にむけてのリワーク活動、児童相談所においては判定の陪席という実習内容でした。このように、医療、教育、福祉という様々な分野の中でクライエントとの関わり方は違いますが、それぞれ臨床心理士が実際の現場でどのように関わっているかということを改めて知ることができました。そして、次年度から実習に行かせていただく立場として、どのような視点をもってその場に踏み込めばよいのかという点や、他の分野の方々とどのように連携していくかというような点において具体的に想像でき、考えることができる機会となりました。また、先輩方が考える「課題」や「新たに提供できる仕事内容について」を報告していただいたことで、次に自分が実習を行う際にその課題についてどのように取組めばよいかやどのような点に気をつけたらよいかということを考えることができました。報告会があったことで、次年度から実習させていただく際によりスムーズに実習に取組み始めることができたように思います。

また、2009年度においては発表する立場として報告会に参加しました。実習の場や実習の内容は前年と大きくは変わっていませんが、この1年間で実習を行った中で、実習先の概要や、どのような視点をもって実習を行ったか、どのような点が課題かというところを発表させていただきました。また、今年度の報告会においては、他分野の先生にも参加していただいたことで、他分野の視点からの意見をいただくことができ、実践実習の考察を、報告会の中でより深めることができました。今年度は発表する立場として、この1年間毎週実習に行く中で感じたことや考えたことを改めてまとめて報告することで、何を学んだかという点を再認識したように思います。また、先生方からより客観的なところからの意見をいただくことができ、これまで実習で活動してきた中で疑問に思っていた点などを解決したり、新たに課題を見つけたり振り返ることができました。そのほかにも、他の実習先での報告を聞くこともでき、自分の実習先との違いや、同様の点を見つけることができ、他分野での現状や課題についてもより深く考えることができました。

この2回の報告会において、どの実習先においても考察として報告されていたことは、「他職種との連携」という点です。今後、卒業して社会で臨床心理の専門家として働く際に、重要なテーマであるということが2回の報告会の考察として明らかとなりました。臨床心理の専門家はそれぞれの職場に多く在籍するわけではなく、他の職種と一緒に働くことが必須とされます。それぞれの職場においてクライエントのことを考える際に、臨床心理という専門性を持ちながら、他職種と連携して考えることが必要なのでは

ないかということを実習の中や報告会の中で感じました。

また、2009年度の報告会においては、「連携するだけではなく、自分の専門性を生かしてそれをどのように発揮するか」という点が課題として挙げられました。1年間実習を行う中で、私たちは実習生として実習先（職場）に合った「自分にできること」を考えながらの実習を行ってきました。しかし、今後の課題として、それを踏まえて「問題提起をする」「新しい視点で切り込む」というような、「新たに提供できる仕事」について考えることやそれを他職種の人に提案し、実行する必要性が挙げられました。そして、これらが次年度の実習生や、私たちが社会に出て実際に仕事をする際の課題になるのではないかということが考えられました。

（今村 美希）

セミナー「臨床心理士の地域実践に求められるもの～現状と課題～」

日時：2009年2月25日
場所：エミリー・ブラウン館

講師：宝塚市立教育総合センター教育相談員　小山 智朗氏
渡辺クリニック心理士　中筋 一仁氏

2009年2月25日（水）、宝塚市立教育総合センター教育相談員の小山智朗氏と渡辺クリニック心理士の中筋一仁氏をお招きし、地域実践活動に従事する臨床心理士としての仕事と役割についてお話を伺った。小山氏からは、「宝塚市立教育総合センターにおける臨床心理士の役割」と題して、不登校児を主な対象とする適応指導教室の意義と役割について、子どもたちの具体的な変化のプロセスを示してお話しいただいた。適応指導教室パルでは“beingの保障”ならびに“doingの保障”の場として、各人のペースに合わせての学習や子どもたちの自主的活動を支援している。“何もしないでいい”安心できる居場所（beingの保障）を満喫することで子どもたちは勉強やスポーツ、遊びなど、自分三昧に好きなことをやり尽すエネルギーが出てくる。学生ボランティア「パルふれんど」や臨床心理士がお兄さんお姉さん的な斜めの関係で臨機応変に対応することで子どもたちのdoingが保障される。パルには訪問指導員もおり、不登校児の家庭訪問などアウトリーチ活動も盛んである。このように、連携しながら子どもたちが自主的に動く力をつける支援の実例が語られた。

中筋氏からは、「精神科クリニックにおける復職支援プログラム（リワーク）の取組」の詳細を伺った。クリニック併設のカウンセリングルームでは、うつ状態の方たちを対象に活動をおこなっている。デイケアでは、絵画、映画、アロマ、ソフトストレッチなどを午後におこない、午前中、復職支援の「リワークプログラム」を実施しているのが特徴である。これは休職中の方々を対象に復職までのステップを支援するものである。生活リズムを整えるための計画表記入や、各自が課題を決めておこなう個別活動、全体活動ではSST、アサーショントレーニング、レクリエーションといったグループ体験など再発予防や機能回復訓練に取組むことで休職中の生活と就業とのギャップを埋め、円滑な復職を目指す。仲間意識のなかで復職への不安を明確化、共有し、合理的な対処活動を促進する。治療効果を機能させ、治療効果を妨げる要素を取り除くことが臨床心理士の重要な役割で、居場所機能を働かせるために、①グループ全体、②対人関係、③個人内で生じていることをアセスメントする3つの心理学的視点をもって関わっていくことが求められる。リワークを実施しているところは少なく、今後ニーズの高まるプログラムである。

両氏ともに、「居場所」の保障、他職種との「連携」、臨床心理士として多元的、複眼的な視点を持つことの重要性を力説しておられたのが印象的であった。臨床心理士を志す院生にとり、本セミナーは実際の臨床心理士の現場を深く知る貴重な機会となった。

（小林 哲郎・國吉 知子）

地域実践臨床家との合同事例研修会（みつば会）

本学では、現場で仕事をしている卒業生（修了生）のリカレント教育と現役院生のキャリア教育、両方の目的をかねて、年に一度、一泊の合同事例研修会（通称「みつば会」）を実施している。

博士前期課程の2年間は心理相談室という施設に来談するクライエントに対応しながら、心理療法の基礎を学んでいくが、それは、時間、場所、料金が決まっていて、動機づけの高いクライエントと出会えるという意味で、守られた心理療法である。そのように、構造化され守られた状況で心理療法の基本を学び、スーパーバイザーと共に、毎回の心理療法の経過を検討することで、手厚い指導がなされるのである。しかし、それが終わると、修了生は、勤務形態はいろいろだが、医療機関、教育相談、スクールカウンセラー、児童相談所、児童養護施設などいろいろな領域の施設で仕事をすることになる。地域実践の現場に出ると、心理療法として構造化が明確なところの方が少ないのが実情である。スクールカウンセラーでは、教職員は同僚であると同時に、コンサルタントをする対象でもある。児童養護施設などでは、日常の生活指導と個別面談は区別しにくい状況である。そのように、臨機応変な対応を必要とする、応用的な仕事をすることになり、治療構造が割合明確な医療機関や教育相談施設でも、他のスタッフや外部機関との分担、協力など連携の事も考えなければならなくなるのである。その上、スーパーバイザーを見つけて、指導してもらえればいいが、職場の臨床心理士の先輩に時々アドバイスをもらえればましな方で、系統だって指導してもらう機会はほとんど無くなってしまうのである。このような、修了生に対してのリカレント教育は専門教育のフォローとして大切なものである。

みつば会では、一日目午後に修了生の一事例、二日目午前に現役生の一事例を提供してもらい、事例検討するという日程で研修をしている。07年度、08年度は修了生にスクールカウンセラーや児童養護施設の事例をもとに、現場での葛藤や悩みを提示してもらいながら、現役生、修了生からの質問や意見、学内教員や元教員のコメントを中心に研修会として教育効果を上げてきた。

09年度のみつば会では、GPの趣旨をふまえて、新たに地域実践の専門家を招待してコメントをもらおうということになった。そこで、臨床心理士の資格も持ち、現在附属中学の校長もされている兵庫教育大学の松本剛教授をゲストコメンテーターとしてお招きして、スクールカウンセラーとしての事例を卒業生から提供してもらった。現場の管理職の立場で、スクールカウンセラーの専門性も熟知された先生に、単なる事例へのコメントのみならず、学校現場や教職員の思い、スクールカウンセラーとしての注意点にも言及してもらい、予想以上に充実し、とても有意義な合同研修会になった。以下に、院生の報告を紹介する。

（小林 哲郎）

本年度は合同事例検討会にGPの企画を盛り込み、地域実践の専門家としてご活躍されている松本剛先生をコメンテーターとしてお招き致しました。先生は、教員の経験もお持ちで、臨床心理士の資格も取得されており、現在は中学校での校長を務めておられます。本大学院の修了生や院生には、資格取得後にスクールカウンセラーを希望する者が多く、今回、松本先生のような方に来ていただいて、お話を伺えたことはまたとない貴重な体験でした。松本先生は、教員の立場からの意見や学校現場が求める臨床心理士の役割について、ケースを交えてお話しくださり、大学院のカンファレンスとはまた違った視点からの見解で、大変興味深く、勉強になりました。特に、学内相談室でのケースとは違い、学校で臨床心理士がどのように関わるのか、学校全体の視点からクライエントや関係者と関わることの重要性が、松本先生のお話から伝わってきました。

今回は、学校現場でスクールカウンセラーをしている修了生に事例を発表していただきました。まず、事例内容をその学校の現

状の説明等交えながら時系列に沿ってお話しいただき、その内容を踏まえて、まず松本先生から、クライエントのことやそのときのスクールカウンセラーの気持ち、学校のシステムなどについてご質問をいただきました。松本先生は、参加者にも問いかけられ、議論が盛り上がりました。

実際、臨床心理士が学校現場に携わる際に、学校の先生方との関わりがとても大事になってきます。スクールカウンセラーの役割は、地域や学校の風土によって異なり、その現場にあった対応を柔軟に行っていかなければなりません。そして、児童生徒だけでなく、先生方も対応に悩む一クライエントであることもしっかり心に留めておかなければなりません。そのように学校現場では、多くのことに意識を張り巡らせ、先生と生徒と保護者の橋渡しとなり、共に考えていくことが重要となってきます。さらに場合によっては、その児童生徒の生活への介入や援助が必要なことがあり、その場合には、先生だけでなく、外部機関との連携も必要な場合もあります。このように行く先々の学校や状況に応じて、臨機応変に動かなくてはならないため、あらゆる状況を想定し、その中でできることを考える習慣を身につけておくことが必要であることがよくわかりました。今回の事例検討会はまさに「地域実践の専門家」の育成を目指した企画の趣旨に適ったものでした。

松本先生のお話では、実際に臨床心理士が遭遇するような場面の例を挙げられ、臨床心理士に起こる葛藤についてもお話しくださいました。特に生徒の情報の守秘義務と先生から求められる情報共有も一つの大きな課題です。

他にもカウンセリングに対する学校側の理解度、臨床心理士が与えられる環境など、様々な問題があり、臨床心理士一人一人がどのように工夫していくかも問われるということなどもお話しくださいました。このような複雑かつ困難な学校現場にいる臨床心理士にとっては、学校の先生方との関係において不安に駆られることもあります。松本先生は、それについて、学校の先生方は、決してスクールカウンセラーに対して拒否的ではなく、実際にどうしていったらいいのか、具体的なアドバイスが欲しいという気持ちがあり、そのような先生方の心理もくみとりながら学校現場に携わることが臨床心理士に求められているとお話しされていました。

松本先生のコメントは、一つ一つが参加者に問いかけるもので、そこにいる参加者一人一人が、その現場の状況を思い浮かべ、自身に置き換え、じっくり考えるといった充実した事例検討会となりました。

（新宅 可奈子）

Ⅲ. 比較文化的視野の陶冶（国際交流）

本GPでは、臨床心理士による地域実践活動において比較文化的視点が不可欠であると考え、以下に報告するような、特論科目「臨床心理比較文化特論」の新設や海外に出向いての国際交流活動を行った。地域社会とはその名の通りローカルなものであるが、同時に、社会のグローバル化の中で、地域社会に多数派の住民とは異なる言語や文化をもつ住民が共存することが、わが国においても自然なことになりつつある。本学の位置する阪神地区においても、韓国、中国、台湾等の近隣諸国からの居住者が少なからずおり、地域への心理臨床活動の対象となる可能性も大いにあると考えられる。そうした際、言葉の問題のみならず、生活習慣や価値観等の文化的背景の違いから生じるギャップが支援活動の妨げにならないとも限らない。そういった意味で、臨床心理士は自分自身の文化的背景を自覚し相対化するとともに、援助対象者の文化的背景に対しての感受性を高め、それに留意しつつ、柔軟な対応が求められることになる。このような問題意識のもとに、授業科目を新設し、韓国、台湾といった近隣諸国を訪問し、そこでの心理臨床実践のあり方を見学し、実践家養成のカリキュラムについて意見を交換するとともに、院生どうしの学術交流の機会を設けた。

（石谷 真一）

臨床心理比較文化特論の開講

本講義では、真の意味での異文化理解とは、また国際交流とは何かということを、学生の一人一人が自らの問題として考えられるようになることを目標とした。つまり、そもそも異文化について理解し、異文化を持つ人々や社会と交流していくためには、自分自身が持つ「文化」—国や歴史といった「文化」のみならず、自分を取り巻く社会や家族といったより個人的な「文化」をも含む—を理解することから始めなければならないからである。これは、「心理臨床」という「異文化」な状況にやって来るクライエントとの出会いにおいても言えることである。講義では、

1. 諸外国における心理臨床の実践と訓練の実際
2. マイノリティーとして社会に生きるということ
3. 難民・移民として社会に生きるということ

等について、講師の体験談および具体的な事例を視覚教材も豊富に取り入れつつ紹介した。

各回の講義を通じて、学生はそれまでは知識としてのみ持っていた事柄を、より身近に、また自分自身に引き寄せながら考えるきっかけになったようである。それは、講義終了時点に提出された、自分自身が心理臨床家を目指すにいたるまでの過程を振り返る半自叙伝的レポートからもうかがえる。

このように、日常の些細な出来事から世界で起こっている大きな出来事に至るまでの様々な事柄について、自らに引き寄せて考える習慣を持つことは、たとえ今後の心理臨床の実践の場が日本国内であったとしても、出会うクライエントが必ずしも外国人ではなかったとしても必要であると考える。なぜなら、心理臨床の場で出会うクライエントが、たとえ同じ日本人で同じ地域に暮らしていたとしても、やはり「心理臨床」という「異文化」の中に飛び込んでくる人たちであるという点では何ら変わりないからである。

当然ながら、各学生の国際体験や語学力は一様ではない。今後は、講師がこの点についてより一層の配慮をすることが必要であると考えている。

（鵜飼 奈津子）

韓国研修 ～韓国ソウル東部児童相談所訪問および明智大学大学院生との交流～

日時：2008年8月22日
場所：ソウル市東部児童相談所

参加者：教員4名（山口 素子、小林 哲郎、國吉 知子、石谷 真一）
大学院生5名

■児童臨床現場の見学

韓国は日本に最も近い国の一つであり、多くの韓国人が日本に居留あるいは移住して暮らしている。近い国でありながら、言語、文字、文化に相違があり、また過去の戦争体験による様々な心理的わだかまりも解消されたわけではない。日本の地域社会で暮らす韓国出自の住民が心理臨床的支援の対象となった際には、こうした背景に十分留意しておかねばならないだろう。さらに、今、韓国においてどのような心理臨床的課題やニーズがあるのか、一般的な心理臨床的支援はどのように為されているのか、そして次代を担う心理臨床実践家の養成はどのように行われているのか、といった韓国の心理臨床事情に精通しておくこともまた、韓国人の援助対象者に適切な支援を行う上で欠かせないであろう。

こうした目的意識をもって、韓国における心理臨床現場を見学でき、実践家から話を聞き、養成課程の教員や学生と交流する機会を模索した結果、以下に報告するような訪問見学および国際交流を実現することができた。なお、今回の訪問実現には京都文教大学教授禹 鍾泰氏に多大な協力をいただいた。

ソウル東部児童相談所は、ソウルに複数ある児童相談所の一つだが、児童養護施設としての機能を併せ持つ総合的な児童福祉施設であった。我々は主として心理相談部門を見学させていただき、施設スタッフ（相談員）から話をうかがうことができた。この相談所の大きな特徴は箱庭療法をとり入れている所にある。従来、韓国においては心理臨床活動はアカデミックな心理学の延長上に海外から輸入されたものが多く、したがって行動療法系の心理臨床的支援が中心となっているようであった。その中で東部児童相談所は、日本の臨床心理学者との交流も多く、韓国の中では比較的少数派の心理臨床実践を志向しているようであった。箱庭療法以外にも、遊戯療法室や音楽療法的ワークショップのための多目的ルームなども用意されていて、一見すると、日本の大学の心理相談室にいるような錯覚を覚えるものであった。また、児童相談所は臨床実践家を養成している大学院の学生を研修生として数多く受け入れているようで、囲碁教室のごとく多数の箱庭を一室に集め並べた研修ルームもあった。それを見る限り、箱庭療法の学習についても、またその臨床的用い方においても必ずしも日本と同様ではないのではと思われた。

■明智大学大学院生との国際交流

上述したように東部児童相談所には学生が実習生として大学の夏休み期間を利用して、研鑽を積んでいた。そこで児童相談所の一室をお借りして、実習に来ている明智（ミョンジ）大学の臨床心理学分野の教員および学生（院生）との交流会を持つことができた。交流会は、明智大学と本学の臨床心理学分野の相互紹介に始まり、両大学の院生が、大学院での教育・学習

のあり方、研究活動や臨床活動について相互に資料を提示しながら紹介するというものであった。

両者の違いも明らかになった。明智大学の大学院生たちの多くは研究活動と臨床（実習）活動とがつながっているものが多く、たとえば医療臨床分野での予防プログラムの開発といった実証研究のベースに乗りやすいテーマが優勢であった。一方、本学の院生の場合、修士論文の研究テーマと臨床（実習）活動とが直接にはリンクせず、臨床活動は大学自前の心理相談室での面接相談を中心とするものであり、かつ原則週1回のスーパーヴィジョンと、週1回の心理相談室事例検討会で指導を受けつつ行うという、極めてインテンシブなものであることが特徴的であった。

両大学の教員同士も相互に質問を出し合い相互理解を深めたが、時間が許せば、さらにもっと深く両国の心理臨床活動の違いが明らかになったように思う。韓国の場合、わが国の臨床心理士に相当するような統一された心理臨床家の資格はなく、それぞれの臨床分野で独自の資格が存在するようであった。また韓国に比べてわが国の心理臨床実践は、個別の心理相談に重きを置き、しかも長期に亘って来談者と臨床心理専門家との関係性を軸に進めていくところに特徴が見出せるように思われた。

今後も韓国の大学院生あるいは教員同士の交流を継続・発展させることを望むものである。

（石谷 真一）

■韓国研修を通して

心理学という同じ分野を学んでいる学生同士で意見を交わすことで、とても刺激を受けました。アジア圏で文化や思考も似ていますが、制度などに違いもあり驚かされることが多かったです。

児童相談所見学の際も、日本では見たこともないような風景がありました。一番印象的だったのが集団で箱庭をする部屋です。また、椅子や畳といった座る様式で、自分が知っている箱庭とは全く別のものでした。音楽療法を取り入れたセラピー専用の部屋など、整った環境があるのは魅力的だと感じました。

韓国研修を通して、違う国の学生との交流し、さらに施設を実際に見ることで、新たな発見がたくさんでき視野を広げることができたように思います。

（水貝（すがい） 美由紀）

台湾研修 ～台湾中原大学との国際学術交流～

日時：2009年9月7日～10日
場所：中原大学

参加者：教員5名（山口 素子、小林 哲郎、國吉 知子、石谷 真一、奥田 紗史美）大学院生10名

■概要

訪問先の中原大学（Chung Yuan Christian University）は台湾の桃園県中壢市にあるキリスト教系の私立総合大学である。開校は1955年、心理系（Dept. of Psychology）は1966年に学部が、1988年に修士課程が設置されている。学術交流会では、まず、中原大学の譚偉象教授により心理系の紹介、台湾における臨床心理学のトレーニングと実践に関するプレゼンテーションが行われた。その後、本学の院生により、神戸女学院、および、心理・行動科学科の紹介と、日本における臨床心理学のトレーニングと実践に関するプレゼンテーションが行われた（プレゼンテーション及び質疑応答はともに英語）。さらに、Student Counseling Center（学生相談室）を見学した後、学生と教員にわかれてそれぞれ交流・意見交換を行った。

■プレゼンテーションについて －台湾と日本の違いを中心に－

最初に行われた双方のプレゼンテーションを通じて、台湾と日本の臨床心理学の現状における違いや共通点が明確になったのは研修の大きな成果である。中原大学における心理学の教育体制は、認知心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学などの多領域がバランスよく組織されている。大学院は3つの専攻に分かれており、臨床心理学はその1つである。なお、台湾では修士課程は3年制である。臨床心理の資格は「Clinical Psychologist」と「Counseling Psychologist」の二種類に分かれており、国家資格である。前者の資格取得者の多くは医療関係で働いており、アセスメントが中心的な仕事とのことであった。また、前者は医療、学校、司法など幅広い専門領域を包括する資格となっており、後者は主に学校領域に限定された資格である。包括的資格と分野の特定された資格の併存は、奇しくも日本においても法制化が検討されていた二資格の考え方と類似している印象を受けた。中原大学において養成されているのは、前者のClinical Psychologistであり、このライセンスを受けるには、日本の臨床心理士と同様に、臨床心理学の専門の課程を修めて修士号を取得することが要件となっている。加えて、1年

間のインターンシップが必須とのことであった。台湾の臨床心理学の学問としての歴史はまだ浅く、中核団体である台湾臨床心理学会（Taiwan Association of Clinical Psychology）の設立は2002年、機関誌（Archives of Clinical Psychology）の発行は2004年からであり、事例研究よりも基礎研究が中心である。スーパーヴィジョンによる訓練はなく、日本の臨床心理教育の体制と大きく異なる。また、台湾の大学院のカリキュラムでは、精神病理学やアセスメントが大きな比重を占めている。先に述べたように、主な就職先である病院ではアセスメントが中心的な業務であるという点も併せると、台湾のClinical Psychologistの専門性は、心理療法よりも、むしろ心理査定及び病理学的所見の提出に関する比重が大きいという印象を受けた。

■Student Counseling Center（学生相談室）

中原大学のStudent Counseling Centerは学生に対する1対1の個別面接のほかにも、グループワークやイベントを開催したり、学生のボランティアを採用したりするなど多様な活動が行われている。誰でも利用できるようなオープンスペースが充実している一方で、相談者のプライバシーは守られるように、一般の者とは別に裏口を設けるなどの工夫もされていた。また開設時間も長く設定されており、全体として利用者に対する細やかな配慮がなされている印象を受けた。

■学生同士の交流（院生による報告）

学生同士で、それぞれの大学（国）の特徴であると思われる技法を発表し合った。本学からは“スクィグル”を紹介した。台湾の学生と日本の学生がペアになり、実際にスクィグルを行った。台湾では描画を用いた検査や療法は身近ではなく、大部分はスクィグルを知らなかった。そのため、日本ではあまり見られないような反応も多く、双方にとって新鮮な体験となった。一方の中原大学からは、“ダンスセラピー”の紹介と体験が行われた。音楽に合わせて、短い列を段々と長い列にしていくというもので、列が長くなり、それ以上動けなくなると終了となる。両大学の学生が入り乱れ、肩に触れることによって、親密度が増したように感じた。ダンスセラピーは、クライエントとの距離を近づけ、セラピーに慣れてもらう手段として用いることがあるとのことであった。今回、日本と台湾との違いも多くあることが理解できたが、同時に、心理的な問題がどの国にとっても重要なものであり、その問題に立ち向かおうとする気持ちは共通のものなのだということを知ることができた。

（富田 真未）

■最後に

帰国後、10月21日には学内で報告会を開催し、訪問した院生が学術交流の成果について発表した。時間をおいて俯瞰することで、多くの収穫や課題について再確認する機会となった。

今回の学術交流は、中原大学の、まさに心のこもった歓待によって、より実り豊かなものとなった。これを機会に、今後、末永い交流に繋げていきたいと考えている。

（奥田 紗史美）

Ⅳ. 大学教育改革プログラム合同フォーラムでのパネル発表

平成19年度大学教育改革プログラム合同フォーラムでのパネル発表

日時:2008年2月10日(日)
場所:横浜国際会議場
出席者:本学大学院人間科学研究科　教授　石谷 真一
　　本学大学院GP推進室　中野 美加

本GP教育カリキュラムの概要をパネルにて掲載・発表した。臨床心理学分野の大学院GPの採択は意外に少なく(3校のみ)、同分野内での相互紹介・意見交換を行ったほか、他分野からも積極的な質問をいただき、関心の高さを感じた。

平成21年度大学教育改革プログラム合同フォーラムでのパネル発表

日時:2010年1月7日(木)
場所:東京ビッグサイト　レセプションホール
出席者:本学大学院人間科学研究科　教授　小林 哲郎
　　本学大学院人間科学研究科　教授　石谷 真一

本GPの3年間にわたって取組んだ諸活動をパネルにて掲載・発表した。今回は発表希望校の中から50大学のみが選ばれたのだが、本GPも無事選ばれ、活動を報告することができた。臨床心理学分野の出席は他に1校のみであり、活動内容もずいぶん異なっていた。本GPの実践的性格を強くアピールできたと考える。

4
評価と課題

今回の大学院GPの活動について、その意義と今後の展望や課題について考えてみたい。

1 臨床心理士による地域援助活動と子育て支援の必要性

心理臨床には「心理アセスメント」「心理相談」「研究活動」と並んで「地域援助」が挙げられ、これまでにも臨床心理士はHIVや震災・犯罪被害者支援にもいち早く取組んできた。そこでは、つねに他職種の専門家との連携が求められるため、能動性、社会性をいかに育成するかが今回のGPの眼目であった。本学の臨床心理学分野は、その前身を含めると25年に及ぶ児童支援の歴史があり、そこで培われた育児支援、発達支援、成人女性への支援などは、本学の貢献しやすい領域である。近年母子を取り巻く社会情勢や環境が激変し、心の専門家による子育て支援は喫緊の課題であることからも今回のGPでは、「子育て支援」を地域実践活動の中心にすえてきた。

2 地域実践力を養成するための大学院教育 ～本学での取組み～

この3年間、我々は、**1) 地域実践機関とのネットワークづくり　2) 臨床実践現場における地域支援活動　3) 比較文化的視野の陶冶　4) 心理相談室による地域実践活動とアウトリーチの展開**　の4点の活動をおこなってきた。

1) 地域実践機関とのネットワークづくり

(1) 他職種の専門家との地域連絡会・シンポジウムの実施

①「子育て支援、地域の取組みと大学の貢献のための連絡会」(07年度)

シンポジスト：西宮市健康福祉局こども部　杉田 水脈氏、私立みそら幼稚園園長　西川 英美氏、本学准教授　石谷 真一氏（肩書は当時）

②「子どもが育つ場を考える～家庭・地域・教育現場・臨床心理士の連携～」(08年度)

シンポジスト：立花愛の園幼稚園園長　濱名 浩氏、瓦木・深津県民交流広場運営委員長　山本 三千氏、本学教授　小林 哲郎氏

③「臨床心理士は地域支援活動をいかに創造できるか、その方法と課題～子育て支援を中心に～」(09年度)

シンポジスト：NPO法人子どもの心理療法支援会理事長　平井 正三氏、NPO法人子どもの心理療法支援会専門会員　竹山 陽子氏、本学教授　國吉 知子氏

地域のニーズを知る機会を持つため、意識的な情報交換の場は必須であるが、その場限りの交流ではなく日常的な意思疎通やネットワーク形成が不可欠である。我々がシンポジウムを継続実施してきた理由はそこにあるが、ようやく連携の地盤が形成されてきたと実感する。なお、連絡会・シンポジウムは継続実施し、今後も連携を深めていく。

(2) 臨床心理士の働く現場と具体的対応を知る

①セミナー「臨床心理士の地域実践に求められるもの～現状と課題～」(08年度)

講師：渡辺クリニック心理士　中筋 一仁氏「精神科クリニックにおける復職支援プログラム（リワーク）の取組」、
宝塚市立教育総合センター教育相談員　小山 智朗氏「宝塚市立教育総合センターにおける臨床心理士の役割」

講師は地域実践実習で指導的立場にある臨床心理士であるが、現場の臨床心理士の役割などが具体例を通して示され、大変刺激的な時間を持つことができた。

②地域実践臨床家との合同事例検討会（みつば会）

本学臨床心理学領域では約80名の修了生を輩出し、多くは医療、教育、福祉関係で仕事に就いている。そこで、

修了生との合同事例検討会を通して地域での臨床実践について学ぶ機会を持った。合宿には現役・歴代の本学教員等（08年度には兵庫教育大学教授・同付属中学校校長の松本剛氏をゲスト講師として招聘）がコメンテーターとして参加し、有意義な交流の場をつくり出すことができた。従来のカウンセリングの枠や制限などの構造を現場でどう適用できるのかなど、改めてその意味を問い直し、再確認する良い経験ができた。

③修了生とのネットワークづくり（07年度～）

修了生と在学生のメーリングリストを作成し、就職情報、勉強会、講演会等の情報提供など、修了生との絆を深めるためのネットワークを構築した。みつば会とともに、修了生、在学生の交流のためのタイムリーなコミュニケーションツールとして機能している。

2）臨床実践現場における地域支援活動

（1）「臨床心理地域実践実習」科目の設置（08年度～）、（2）同報告会（08年度～）

（1）は院生による地域実践活動としての実習だが、"発見学習"的要素を盛り込んだ点が新しい。従来の受身の実習ではなく、能動的に心理士としてできる役割、他領域と心理士との専門性の違いなどについて自ら実習テーマを設定し情報収集もおこなうことで地域支援への意識を高めることができた。

（2）は、実習内容のみならず、臨床心理士に現場で何が期待され、実際に何ができるのかの提言も含めての報告会である。これまで、他職種との連携の重要性、家族へのサポート役、集団力動を理解し運営に反映させること、枠や制限などの意味を援用しての患者理解、複眼視できる立場にあることを生かして関わることなどの提言が積極的になされた。組織に何を提供できるのか、仕事を与えられるのを待つのではなく、状況にそった自分の動きを考える（創造する）意識づけができたことは大きいと考える。

3）比較文化的視野の陶冶 ～日本語以外の言語・文化を持つクライエント支援～

（1）韓国ソウル市東部児童相談所見学、明智大学大学院生との交流（08年度）

（2）台湾中原大学心理学科訪問、教員、臨床系大学院生との学術交流（09年度）

（3）「臨床心理比較文化特論」開講（07年度～）

海外の情報を知り、交流し、心理臨床の異同を学ぶことは、「地域」をより広く捉える態度の育成という意味で重要である。今回、近隣国を訪問することで、各国の研究・臨床の動向、心理士養成などの情報を得られたのは大きな収穫であり、異なる文化や価値観を柔軟に捉える素地となった。これが機縁となっての教員・院生レベルでの交流が期待される。

4）心理相談室による地域実践活動とアウトリーチの展開

（1）心理相談室ウィーク（無料体験相談と講演会）（07年度～）

①無料体験相談：地域の一般の方々を対象とした単発の無料相談。のべ20名が利用。実施後に院生による自主的な改善点や相談のあり方についての話し合いや教員とのディスカッションが継続的に持たれ、相談の原点を見直す有意義な経験となった。

②講演会と心理相談室の見学：地域への啓蒙活動として教員による公開講演会を開催した。酷暑時期にもかかわらず、のべ180名の参加を得、地域の方々の心の問題への関心の高さを知るとともに、そのニーズに応えることができた。心理相談室見学では、教員と院生の案内で緑あふれる本学の面接室や明るいプレイルームに触れていただく機会を持った。近隣の方でも本学の心理相談室をご存知ない方も多く、心相の活動を周知する重要性を痛感した。これまでに実施した講座の内容は下記の通りである。

(07年度)「子どもと向き合っていますか～ほめること、叱ること～」國吉 知子教授

(08年度)「家庭、地域、学校で連携して子どもを育てるために―スクールカウンセラーの視点から―」小林 哲郎教授

(09年度)「心の悩みと心の病気」水田 一郎教授

(2) アウトリーチ ～アンケート送付による地域ニーズの把握とコンサルテーション～

例年、アンケートを地域の諸機関に発送し、本相談室との連携希望についての回答を求めている。依頼には教員が訪問し、必要に応じてコンサルテーションを実施している。

3 今後の課題 ～地域支援のためのアクションプラン～

1) 個人の方々を対象に

(1) 悩みだけでなく広く人生そのものを考える場としての相談室：「心相ウィーク」「無料体験カウンセリング」の継続実施など、利用しやすい雰囲気、システムづくり

(2) 親子がともに育つ支援：親の自己理解を深める場としての講演会、心理教育的グループワークの実施など、日常に生かせる臨床心理学の知識やスキル伝達の場の設定

(3) 地域支援に役立つ研究と情報発信：幼稚園、学校、家族、子育て、発達障害に関する「臨床心理学的研究」を通して地域のニーズを探り、問題解決への道筋を照らす

2) 地域の専門家を対象に

(1) 専門家を対象とした「連絡会・講演会」の実施による連携ネットワークの推進・強化

(2)「コンサルテーション」の強化

アンケートは実施していたが、「アウトリーチ」についてのアプローチはやや不足していたと思われる。そこで、この3年間の活動をさらに発展させ、次年度より心理相談室「地域実践部」に「コンサルテーション窓口」を新設し、地域ニーズに積極的に応えうる態勢を整え、アウトリーチの充実を図りたいと考える。これは今回のGPの成果とも言え、小規模な組織ではあるが、本学ならではの細やかな対応を心がけ、臨床心理士の視点を地域に活かせる場の創造をこれからも継続していきたい。

(國吉 知子)

5
資料

ブログの公開

2008年2月19日、大学院教育改革支援プログラム「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」のホームページに、インフォメーションを開設した。カテゴリは、「ニュース&トピックス」と「活動紹介」に分かれており、シンポジウムや心理相談室ウィークなど、広く地域に公開したイヴェントのみならず、海外研修や地域実践実習の成果など、院生の活動もその都度公開した。

活動スケジュール

年度	日時	内容
2007年度	2月10日	平成19年度大学教育改革プログラム合同フォーラム参加
	2月19日	インフォメーション開設
	2月23日	「子育て支援、地域の取組みと大学の貢献のための連絡会」開催
2008年度	4月1日	2008年度「臨床心理地域実践実習」開始
	5月	平成19年度活動報告書完成
	6月28日、29日	地域実践臨床家との合同事例検討会（みつば会）
	7月28日～8月1日	心理相談室ウィーク：無料体験相談
	7月30日	心理相談室ウィーク講演会 「家庭、地域、学校で連携して子どもを育てるために―スクールカウンセラーの視点から―」開催
	8月21日～23日	韓国明智大学・ソウル市東部児童相談所訪問・交流
	9月26日	「臨床心理比較文化特論」開講
	10月	人間科学研究科ホームページ、リニューアル
	1月7日	2008年度臨床心理地域実践実習報告会
	2月25日	セミナー「臨床心理士の地域実践に求められるもの～現状と課題～」開催
	3月7日	シンポジウム「子どもが育つ場を考える～家庭・地域・教育現場・臨床心理士の連携～」開催
2009年度	4月1日	2009年度「臨床心理地域実践実習」開始 平成20年度活動報告書完成
	7月4日、5日	地域実践臨床家との合同事例検討会（みつば会）
	7月30日～8月5日	心理相談室ウィーク：無料体験相談
	7月31日	心理相談室ウィーク講演会「心の悩みと心の病気」開催
	9月7日～10日	台湾中原大学訪問・国際学術交流
	9月28日	「臨床心理比較文化特論」開講
	10月21日	台湾研修報告会
	1月7日	平成21年度大学教育改革プログラム合同フォーラム 大学院GP ポスターセッション出展・参加
	2月10日	2009年度臨床心理地域実践実習報告会
	3月7日	シンポジウム 「臨床心理士は地域支援活動をいかに創造できるか、その方法と課題 ～子育て支援を中心に～」開催

あとがき

2007年の春、大学院GPの申請書作成に始まり、3年に及ぶ活動を、この報告書の作成をもって無事終えることができました。様々な活動でご支援・ご協力いただいた方々、本学の教職員の皆様方、そして学びの過程を共にした大学院生諸氏に心からお礼申し上げます。本GPは臨床心理学分野の教員4,5名が、各々の技能、経験、人的ネットワークを結集して、手作りで作り上げたものです。活動の規模としてはこじんまりとしたものかもしれませんが、己の心を使って相手の心と通じ合うという、臨床心理学の根本がよく生かされた活動であったと自負しております。GPを機に新たに設けたカリキュラムは存続しますし、地域に向けて始めた諸事業も継続・発展させて参ります。今後とも人間科学研究科臨床心理学分野および心理相談室を厳しく暖かく見守っていただきますよう、お願いいたします。

人間科学研究科　教授

石谷 真一

以下の皆様と機関にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

アウトリーチ活動の実習化

■2007年度シンポジウム

杉田 水脈氏（西宮市健康福祉局こども部）/西川 英美氏（私立みそら幼稚園園長）

■2008年度シンポジウム

濱名 浩氏（立花愛の園幼稚園園長　兵庫県私立幼稚園協会副理事長）/
山本 三千氏（瓦木・深津県民交流広場（ぽっかぽかひろば）運営委員長）

■2009年度シンポジウム

平井 正三氏（御池心理療法センター代表　NPO法人子どもの心理療法支援会理事長）/
竹山 陽子氏（御池心理療法センター　NPO法人子どもの心理療法支援会専門会員）

地域実践活動の実習化

■臨床心理地域実践実習

平井 孝男氏（医療法人平井クリニック院長）/渡辺 洋一郎氏（医療法人渡辺クリニック院長）/三好 崇文氏（医療法人渡辺クリニック副院長）/中筋 一仁氏（医療法人渡辺クリニックグループ部門部長）/中元 華奈氏（医療法人渡辺クリニック精神保健福祉士）/神戸市こども家庭センターの皆様/生野 照子氏（社会医療法人弘道会浪速生野病院心身医療科部長）/橋元 泰雄氏（宝塚市立教育総合センター所長）/中川 絢子氏（宝塚市立教育総合センター教育支援課課長）/竹部 篤弘氏（宝塚市立教育総合センター教育支援課指導主事）/織田 泰史氏（宝塚市立教育総合センター教育支援課教育相談員）

■実践実習報告会

小山 智朗氏（宝塚市立教育総合センター教育支援課教育相談員）/中筋 一仁氏（医療法人渡辺クリニックグループ部門部長）

比較文化的視野の陶冶

■臨床心理比較文化特論

鵜飼 奈津子氏（大阪経済大学人間科学部准教授）

■国際交流

禹 鍾泰氏（京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科教授）/明智大学（Myong Ji University）の先生と学生の皆様/
ソウル東部児童相談所の皆様/中原大学（Chung Yuan Christian University）の先生と学生の皆様

PROJECT STAFF 一覧

臨床心理学

■教授

山口 素子/生野 照子/小林 哲郎/國吉 知子/石谷 真一

■専任講師

奥田 紗史美

GP推進室

宮本 桃英/中野 美加/大塚 千華/山脇 敦子

健康科学

■教授

水田 一郎

神戸女学院大学大学院　人間科学研究科
大学院教育改革支援プログラム
「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」

発行　神戸女学院大学大学院　人間科学研究科
〒662-8505　兵庫県西宮市岡田山4-1
http://www.kobe-c.ac.jp

発行日　2010年3月

編集　神戸女学院大学 人間科学部GP推進室
tel: 0798-51-8591
http://humangp.kobe-c.ac.jp/graduate01/

印刷・製本　大伸社

無断での転載・複写を禁じます。

神戸女学院大学大学院

〒662-8505　兵庫県西宮市岡田山4番1号
神戸女学院大学　　人間科学部GP推進室
TEL　0798 (51) 8591
E-mail　jinkagp@mail.kobe-c.ac.jp
HP　http://humangp.kobe-c.ac.jp/

FSC ミックス品
FSC認証林及び管理された森林からの製品グループです
www.fsc.org　Cert no. SA-COC-001220
© 1996 Forest Stewardship Council

PRINTED WITH SOY INK